

フロレンスキイにおける 神と被造物の関係性の問題

— 知識の視点から —

ブラジミロフ・イボウ

はじめに

パヴェル・フロレンスキイ (Павел Флоренский 一八八二—一九三七年) の知識論における最も重要な問題の一つは、「神と被造物」の問題である。人間が創造者である神との関係性を理解すれば、それだけで世界を知るという傲慢な行為を正当化できる。フロレンスキイは、ルネサンス以降、つまり近代の思想や社会に対して最も批判的なロシアの思想家の一人である。それゆえ、彼は自身が信仰する正教という非常に古い一神教的宗教の根本を取り戻すことを目指している。人間の真の知識は神に帰依することによって得ることができる。この考えは、彼の思想の中で非常に重要な役割を果たしている。この神に帰依することが苦行であるとフロレンスキイは理解する。具体的に言うとは、心、

つまり精神生活の苦行を意味する。「心としての知識」はキリスト教の聖師父におけるメインテーマであり、さらにはユダヤ教やイスラム教という一神教的伝統におけるテーマでもある。ユダヤ教とイスラム教における心の神秘主義とフロレンスキイにおけるそれとの比較は、フロレンスキイ研究の中で、未開拓の分野である。本稿ではこのようなテーマについて考察していきたい。

フロレンスキイは博学者として世に名を馳せ、知識人世界を意味するインテリゲンツィアの主なイデオログになつたといつても過言ではない。一神教と聖師父的教会という理念を取り戻すことを呼びかけたのはフロレンスキイだけでなく、当時のほかの思想家も同様に呼びかけた。例えば、「新たな宗教意識」という知識人運動の代表的な思想家の一人であるヴァシリイ・ロザノフも旧約聖書で描かれている世界を理想化した。また、ゲオルギイ・フロレンスキイやブラジミル・ロススキイなども、聖師父的教会の思想の復活を呼びかけ、一九三〇年代以降に学派「新たな聖師父的総合」を誕生させた。しかし厳密に言うとは、この学派の行ったことは、聖師的教会の教えを現代人の生活に都合よく合わせたようなもので、聖師父たちの教えとは、掛け離れたものだったのである。ここで知っておくべきことは、当時

のロシアのインテリゲンツィアのほとんどの思想家が、何らかの形で聖師父たちの理想を復活させたかっただというところである。ロシアの十月革命後にブルガコフ、ベルジャーエフ、フロレンスキイなど数多くの知識人が海外へ亡命したため、このような傾向は世界的に知られることになった。

本稿では、一神教と聖師父学の理念を復活させようとしていた、ロシアの知識人世界の代表者の一人であるフロレンスキイの独特な思想を紹介する。そのために、「神と被造物の問題」について考察し、フロレンスキイの神学における知識の理論を徹底的に追求してゆきたい。フロレンスキイにおける「聖師父学的理想の復活」は「知識」と深く結びつけている。正教会の修行者たちは真の知識を有し、その真の知識は修行の中でしか得ることはできないという彼の主な理論を明らかにする。その後、彼の世界観では真の学的知識の源は一神教的宗教であると、結論づけることにする。その結論に従えば、真の学的知識は一神教の範囲内ではか可能にならないと言える。当然ながらそれは、現代のポストモダンリズムにおける学的知識に対する相対主義的的理解とは正反対である。

一、完全なる人格の基礎である修行

フロレンスキイがルネサンス以降の思想、さらに芸術、社会全体を批判するのは、近代人が人間を中心とし、主観的に物事を考えるからである。フロレンスキイは神を中心とした考え方を取り戻すべきだと考えている。また彼の主な著作である『真理の柱と基礎』の「被造物」という章の冒頭部分では、人間は客観的に物事を見るようにと呼びかけている。当然ながら、有限な生き物である人間にとってこのような呼びかけは、個人としての人生と暮らしにおいて危険を感じさせるものである。しかしフロレンスキイは、人間がたとえどうなるうとも客観性に戻るべきであると主張し、また聖書の預言者のように「自分のためではなく、神のために生きよ」と呼びかけている。フロレンスキイにとって客観的に生きるということは、抽象化された考えではなく、具体的な人間の生き方である。つまり、客観的に生きることは、自然、すべての被造物と一緒に生きて生きることである。自然の創造者は神であるから、自然は神の世界のことを教えてくれるのだと、フロレンスキイは考える。人間は自然という被造物を観察しながら、「この被造物の中で、優れている神の世界の自然に気づかなければな

らない」と彼は述べている。²⁾

人間が自分の主観性をあきらめ、自然の客観性から知識を得るのを目指すことは、修行の理想だとわかるであろう。つまりフロレンスキイの思想において、合理的知識とはまた別の「修行としての知識」という経験からの知識に対する別の理解が、さらに可能になってくる。古代から正教会では修行が存在し、修行者は理想的な生き方をしていると考えられてきた。その理想を生かしながら多くの人々がエジプトの砂漠、バルカン半島の修道院、コーカサス地方の山々、中央アジアなどで現在も修行を続けている。修行者たちは、激しい苦行に彼らの人生を捧げ、その修行の実践として断食し、祈り、また自然を眺めたりなどする。しかし、これらひとつひとつの行為のどれもが根本ではない。修行の真髄はフロレンスキイの次の言葉でわかる。

「修行者の宝は、人間の人格を取り戻すことであり、つまり純潔的人格である。³⁾」

先に述べた苦行のそれぞれの行いの役割は、純潔な生活を送ることによって、自分の人格、つまり自分自身を取り

戻して救うことである。「純潔さとは壊されていない自然である」というミラノのアンプロジウスの言葉を、フロレンスキイは引用している。アンプロジウスの使うラテン語では「純潔」は、*pudor virginis* である。一方、フロレンスキイがここで言う「純潔」という単語は、スラブ語では *brnomylie* (ツェロムドリエ) であり、それは *благое* 「全」と *мыслие* 「知恵」から成り立っている。フロレンスキイの言う「純潔となった人格」は、「人格が完全な知恵を得た」というようにも受け取れる。苦行の実践は、修行者がこのような純潔さのある生活によって、自分自身の人格を復活させるための単なる支援にすぎない。つまり、フロレンスキイの使う正教会のスラブ語のほうが、自然かつ有機的に修行者の理想と知識の理論を結びつけている。苦行によって修行者は、真の知恵を習得し、それによって一切の被造物を一つの全体として把握する。この全体の知恵また純潔さは、壊されるときに自然も破壊される。このような状態はフロレンスキイにとって悪であり、罪なのである。

二、屈折した善である悪

これまでで明らかに became したように、フロレンスキイに

とつて悪とは、自然が壊されることである。つまり、悪と罪は「精神的屈折」であり、客観的なものではない。これまでで、修行の役割も明らかになつたであろう。修行の役割とは罪に対抗し、失われた秩序を取り戻すことである。フロレンスキイは修行者のことを「精神的な整形外科医」と呼び、彼らの「整形外科学こそが聖師父の言う修行の狭い道」であると述べている。しかし極端な苦行を實踐している集団は、世界や自然を悪いもの、あるいは幻想と見なす傾向がある。その例として挙げられるのが、古代のグノーシス主義者であり、その多くは物質的世界を救済不可能な根本悪として理解している。したがつて彼らにとつての救済とは、物質そのものを捨てることであり、多くのグノーシス主義の集団は、結婚、性的関係、社会全体を完全に否定している。一方、一切が無常であると考える宗教は、インドで誕生した仏教、ジャイナ教のような宗教である。それらに対して、キリスト教は全く違った考えを持つ宗教である。これまででわかつたように、キリスト教にとつて自然は神の被造物であるから、神が決めた秩序なのである。またフロレンスキイが述べているように、この秩序が壊されてしまうことこそが、悪なのである。修行者たちは、この屈折した善である悪を自分たちの修行によつて訊す。彼

らにとつて、本来の秩序、善を取り戻すという行為は、学的知識の探求でもある。これこそが一神教における学の可能性である。

三、全体としての身体

フロレンスキイは、正教の聖師父の伝統を代表する者であると自覚している。したがつて、物質的世界の現実を一切否定はしていない。彼にとつて客観的に知ることは神の自然を破壊せず、決められた秩序に従うことである。この秩序は精神的にも物質的にも現実的なものである。物質は神の被造物であるから、神の世界を理解させてくれるヒントを有している。フロレンスキイは知識の可能性を考え、人間の身体を取り上げる。それには二つの理由がある。その一つは、人間の身体は、我々に最も身近な被造物であるからであり、もう一つは身体の構造は、一つの全体であるからである。フロレンスキイは、『真理の柱と基礎』の中における概念はもちろんのこと、他の著作でも取り上げている概念を言語学的に分析する傾向にある。なぜなら彼は言葉というものをプラトン主義的に考えているからである。ある名前は偶然ではなく、その対象との密接な関係がある

ため、名付けられる理由がある。言い換えれば、名前はその対象の内面的意味を表している。フロレンスキイは「身体」も同様に扱い、意味の分析から始めている。フロレンスキイは、古代スラブ語における「身体」(тѣло)と「全体、完全」(цѣло, цѣлѣ)が、同じ語源から由来していると考える。つまり、物質的存在は何らかの形で完全なもの、一つの全体の理念と結びついている。フロレンスキイは、どの臓器、またどの四肢を見ても、「その統一性が見える」と述べている。さらに、これらの臓器や四肢の裏側には、「生きている人格」が存在する。フロレンスキイにとつて、身体を一つの統一、または全体として考えることは、「存在論的外側から存在論的中心への動き」なのである。ここで彼は、教会のキリスト論の二つの概念を用いている。それらはホモウシオス(ὁμοούσιος)と、ホモイウシオス(ὁμοιούσιος)である。ヒエロニムスによると、四世紀から五世紀にわたってキリスト教徒の中で最も数の多かったのは、古代のアリウス主義者であった。彼らによると、子は神なる父と似た実体(ホモイウシオス)ではあるが、同一実体(ホモウシオス)ではないと考えていた。正教徒はそれに激しく抵抗し、ニケヤ信経にイエス・キリストが父と同一実体(ὁμοούσιος τῷ Πατρὶ)であるとされた。フロレンスキイ

はその概念の区別を用いて、肉体のホモウシオスの性質が人間の精神的統一を保証してくれると考えた。そのホモウシオスの性質こそが、「身体の統一の源」「身体の中の身体」「身体それ自体」なのである。一方、ホモイウシオスの性質はバラバラになつた身体に基づいて、ホモイウシオスの思想が身体のパーツを部分的にしか見ず、被造物そのものを考えない。ここで日本語において身体の意味する「からだ」の語源を考えてみると、興味深い。古代ではこの語は「から」と言い、それは殻を意味していた。フロレンスキイは身体それぞれのパーツに殻という言葉を使い、この殻は真の何かを包んでいる。

フロレンスキイにとつて、人々が身体、またはすべての被造物を一つの統一として見なしているのか、または様々な殻の集まりとして見なしているのかということが、正教的考え方と非正教的考え方の違いの知識論的基準である。正教徒は被造物と直接的に接触し、修行者たちは世界または自然をホモウシオス的に見ている。フロレンスキイは非正教の人たちのことを、「プロテスタントぶつている人」「ホモイウシアン」などと呼び、彼らは主観的・美学的に形式のみを眺めているという。また彼らは悟性の奴隷であり、すべてを悟性によつて理解しようとしているのだという。

このホモイウシオスという言葉は、キリスト論論争から誕生したのだが、フロレンスキイは一つの物の見方として、古代ギリシア・ローマの異教徒に対しても使っている。彼はアリストテレスの著書『心とは何か』の中で、タレスが述べたとされている言葉「すべてが神々で満たされている」を引用している。またフロレンスキイは、この言葉をアレクサンドリアのアタナシオスが自身の著書『異教徒駁論』の中で述べている言葉「多神教は無神論、多くの始まりは始まりではない」を用いて、反論している。古代人にとってはすべての物事は現象である。しかし現象は神々のようにたくさんあるが、それらを統一させるものを知らなければ、正当な知識論は誕生しない。

四、恐怖

フロレンスキイによると古代ギリシア・ローマの宗教だけでなく、すべての非キリスト教的信仰の特徴は、恐怖であるということである。古代人はもちろんのこと、恩寵の意識をもたないすべての人々は、悪霊に対して恐怖のみを感じているという。フロレンスキイは悪霊に恐怖を感じることしかない宗教の例として、古代ギリシアの宗教、大乘

仏教などを取り上げている。彼の解釈によると、神の恩寵をもたない人間は物事の本質に恐怖を感じる。そのために、先に述べた殻、またニーチェが著書『悦ばしき知識』の中で「皮」と呼んだものばかりを見ている。古代人がこの「皮」のみを目指していることは、古代の芸術を見てもわかる。フロレンスキイによると、その芸術を分析すると、古代人は物事の「魂」を好まなかったという。なぜなら「皮」をより奥に深く入ると、カオスと恐怖が待っているからである。したがって古代芸術の有名な樂觀主義は、フロレンスキイにとっては、偽物なのである。ここで、偽ロンギヌスの著作『崇高について』におけるパレンティルソス(παρηντιλσοσ)という概念を、例として取り上げたい。パレンティルソスとは大げさな感情を表し、その感情はその状況には不自然だという意味である。古代ギリシアの芸術は、実に豪華ではあるが、それは不自然であることから古代ギリシアの知識はホモウシオスの知識、つまり正教における知識を理解できないと結論づけなければならない。

五、三つの神秘主義

これまで述べてきたことから明らかになったことは、身

体が一つの統一であるなら、その統一には一つを中心、先に述べたように、殻に包まれた真の何かでなければならぬ。さらにこの中心の裏には、ホモウシオス的人格が存在すると見える。フロレンスキイは中世の博学者のように、身体を細かく分析している。彼によると人間の身体は、頭、胸、腹の三つの部分に自然と分かれている。さらに上部と下部はホモテイピの関係性¹⁵⁾にあり、つまり下部は上部が鏡に映る姿のようなものである。フロレンスキイはそれらを上部の極と下部の極と呼び、人格の存在論的中心は、その間に存在すると述べている。つまり、人格の中心は胸である。それらの三つの部分には、それぞれ重要な役割がある。腹は食べ物の消化、吸収と出産を司り、胸は感覚と感情の中心であり、頭は生命と意識の中心部分となっている。精神的な意味で宗教者は三つのいずれかの部分と関係する宗教的実践を行うと、その宗教者は「臓器の神秘主義者」になるのである。正教的神秘主義は、身体を中心とした人格の中心である胸に集中している。フロレンスキイにとって胸の神秘は、「正常」の神秘主義であり、その神秘主義を表現できる方法は、教会の恩寵の道のみである。胸の神秘は人間に栄養を与え、人格を成長させることができる。残りの二つの神秘主義には恩寵はなく、人格の統一を壊し

ているのである。フロレンスキイはその二つについて「偽の神秘主義」と呼んでいる。なぜならば、その二つの神秘主義はすべての源が三位一体であることを無視し、すでに混乱している人間をより一層邪悪にしているからである。フロレンスキイは腹の神秘を子宮の神秘とも呼び、その例は古代と現代のオルギアの宗教集団、ローマ・カトリシズムなどである。そして頭の神秘の例として、フロレンスキイは、インドのヨーガや、ブラヴァツキー夫人の神智学、ルドルフ・シュタイナーのグノーシス主義という例を挙げている。当然ここにおいて、フロレンスキイは非正教的宗教を区別させることを分類することが課題ではない。彼にとつての課題は、正教の範囲を明確にすることである。フロレンスキイは自身の著作の中で、正教とキリスト教を同義語として使っているが、それが彼の特徴でもあり、ロシアの宗教思想に見られる傾向でもある。修行者はそのキリスト教、つまり正教の範囲を超えてはいけなくと彼は警告している。なぜならば、その範囲を超えてしまうと、彼の言う「人生をもたらず恩寵」の神秘主義と離れてしまうからである。当然ながら、正教会以外にも神秘主義というものは存在する。それはフロレンスキイの言う「非恩寵的神秘」である。この非恩寵的神秘は人格を墮落・破壊させる

力を持つ。つまり、修行者が教会と離れてしまつたら、自身の修行によつて滅びてしまうことになる。この考へは教会の聖師父たちに基づき、聖師父たちは人間がどのような罪を犯しても、たとえ姦淫の罪を犯しても決して恐れてはならず、祈りと修行を恐れなければならない、と述べている。ここで、ビザンチウム典礼カトリック教会のアメリカ人聖職者ロバート・スレシンスキーを取り上げよう。彼は著書『パヴェル・フロレンスキー 愛の形而上学』（二九八四年）の中で、フロレンスキーのそれぞれの神秘主義的経験の分け方が不自然で、わざとらしい分け方であり、カトリック的神秘主義描写は、特に不必要なものであると述べている。スレシンスキーはエキュメニカル運動と関係のある人物で、フロレンスキーの主張が不公平で適切ではないと主張している。しかしフロレンスキー自身は、不適切なことを述べることを決して恐れてはいない。彼は自身自身が理解している教会の聖伝を素直に述べるという義務を背負っているだけなのである。

六、心としての知識

現代ではフロレンスキー研究は、かなり豊かなものに

なつてきている。しかし、「フロレンスキーと中世ユダヤ教の關係」という分野については、未だ研究がされていない。そのテーマについては彼は、『真理の柱と基礎』の章「被造物」の、その一箇所でしかふれていないが、彼の全体的な思想の中でそれは重要な位置を占めるのではないだろうか。なぜ、これまで研究者がその分野にふれてこなかったのか、興味深いところである。ここからはフロレンスキーとヘブライ思想との対話を紹介しながら、「心と知識」というテーマを考えていきたい。『真理の柱と基礎』の中で、フロレンスキーは、バヒヤ・ベン・ヨセフ・イブン・パクダ (Barḥya ben Joseph ibn Paquda 十一世紀) とモーシエ・ベン・マイモーン (Moses ben Maimon 一一三五〜一二〇四年・マイモニデス) という二人の中世のユダヤ思想家を取り上げている。また、ユダヤ系ロシア人のモイセイ・ヨシフォヴィッチ・バジレフスキー (一八四〇〜一九〇二年) の研究も参考にしている。バジレフスキーは作家、ユダヤ教学者、ヘブライ文化学者であり、彼の研究が十九世紀後半のロシアで非常に高く評価される。しかし貧窮した暮らしに思い悩み、さらに自身の研究を自費出版したことで破産したせい^①か、一切世に名前が出ることはなくなつた。彼は多くの本を書き残しているが、彼の最も重要な著作であ

る『一神教の知識の発展に与えた影響』（一八八三年）を含め、書き残した本は僅少本である。しかしフロレンスキイがその本を細かく詳細に引用しているため、『真理の柱と基礎』がバジレフスキイの独特な思想を記録している宝庫だと言える。バジレフスキイの思想はバヒヤとマイモニデスと密接に混じり合っており、それをフロレンスキイの文脈で紹介していきたい。

バヒヤの主な著作は、『心の義務への教示』Kitab al-Hidaya ila faraid al-qulub である。彼はその書をアル・アンダルスつまり、アラビアの統治下のイベリア半島で、ヘブライの文字で書かれたアラビア語で記述した。バヒヤは『心の義務への教示』を執筆中にアラビア語の苦行に関する書物 (zuhd) を参考にした可能性はある。また彼の思想にはスフィの神秘主義の影響が感じられる。著書の題目に「心」という言葉があるというだけで、イスラム教神秘主義の伝統に属していると言える。さらに彼に影響を及ぼしたかもしれないアブ・タリブ・アル・マツキ（十世紀）は、Qut al-qulub（心の栄養）と Hayat al-qulub（心の生活）という書が代表的である。イスラムの神学者、神秘主義者アル・ガザリー（Abu Hamid Muhammad ibn

Muhammad al-Ghazali 一〇五八―一一一年）を含めて、イスラムの神秘主義者の著作とバヒヤには、題目に心という言葉があるだけでなく、それらの著書が神学・知識的作品であるという信念も共通している。さらにそれらの著作の構成も酷似しており、具体的にそれは知識には九つの段階があつて、その最高の九つ目は神への愛であつたりすることも共通点である。もし、バヒヤがアル・ガザリーの影響を受けたとしても、彼が純粹ユダヤ教の信仰を込めた思想を生み出したと言える。同じく、フロレンスキイはバヒヤとマイモニデスの神秘主義と神学を自分の思想に受け入れたが、その結果として、フロレンスキイは完全な正教的神秘主義を生み出したと言える。コーランとスフィズムにおける重要な理念は、人間の人格は秘密であるということである。その秘密の中心は、人間の胸 *sudur* である。全知全能の神が、人間のすべての秘密を知るといふ考えは、「神は胸の秘密を知っている」*'alim bi-dhat al-sudur* という言葉で表される。胸とは内面に隠された自我のメタファーであり、さらに胸と心は同義語として使われる。²³ ムタジラ派（八〜九世紀）の神学者たちは心と四肢の区別をし始め、その影響はスフィの神秘主義者が受け継ぎ、バヒヤとアル・ガザリーもその影響を受けている。

この伝統において、心、つまり、内面的修行が表面的な宗教的儀式よりも重要であるとされる。この伝統における主な考えである真理と現実を一緒にしたり、胸と心が人格の中心であることなど、フロレンスキイとバヒヤの共通点は驚くほど多い。

フロレンスキイは胸が身体を中心であるのなら、心は胸の中心であると述べている。彼はヘブライ語で心を意味する言葉 *lev* と *l'vav* の厳密な言語学的分析を行い、また聖書における「海の心に」 *roa, l'ro bil'vav yanim* のような表現も取り入れ、心は人間の中心であり、人間の存在の根であると述べている。フロレンスキイの解釈によると、バヒヤにおける「心の統一」とキリスト教のホモウシオス的「神の統一」は深く関係していて、被造物である人間は宗教的実践の中で、この統一の一部になることは可能である。

自分自身を清める純潔の宗教は神との接触到に至り、その神の接触は人格を秩序立った状態にしてくれるのである。それこそが、修行者の使命である。そのために、正教会の神秘主義は常に心に重きを置き、またなぜ正教会の神秘そのものが胸の神秘であるのかを説明している。修行者が心

を清めることに成功すれば、身体全体の救済とつながるのである。さらに言うところ、身体は人間と他の被造物の境目であるため、人間が自分の身体を通して自然に属している。そしてバヒヤの言葉を借りるなら「心の義務」を満たすと、人間の救済がすべての被造物の救済と関係してくるということである。そのような理由で修行者が「滅びない身体、滅びない精神」を習得し、自然のすべての秘密を知ることができるのである。しかし修行者はその知識を謙虚な姿勢で身につけている。

バヒヤの言う苦行とそれを受け継ぐとするフロレンスキイの修行によると、人間は常に世界と接触していなければならない。世界を研究することが神の知恵と接触する唯一の方法である。一方、被造物を研究すればするほど、被造物の統一性を発見することができる。バヒヤによると世界における多様性が神の存在の証拠だと考え、フロレンスキイはそれに賛成している。ここではフロレンスキイがマイモニデスを取り上げる。マイモニデスは著書『迷える人々の為の導き』七十二章で書いているように、宇宙はルベントシメオンのような一つの個人 *individuum* であるという。

『真理と柱の基礎』はフロレンスキイの主な神学的な著作であり、その中で彼は、キリスト教の教義を取り上げていく。しかし、彼はこの早い段階から、儀式、聖画像、教会に基づく数・物理学的思想などにも興味を持ち始め、それらの問題を取り扱う彼の思想を彼自身が人間学と名付ける。フロレンスキイはこの人間学について、主に『カルトの哲学』と『思考の分水界』の中で記述している。『思考の分水界』の中の章である「大宇宙と小宇宙」の冒頭部分では、彼は次のように述べている。

「思考は様々な道を用いて、それらが一つの理解に至る。それは世界と人間との理想的つながりである。世界と人間は互いに支え合い、互いに浸透し合い、本質的に関係し合っている」。

この著作においてもフロレンスキイは、マイモニデスの同じ引用を用い、宇宙は一つの生きていく個人であると述べている。フロレンスキイ神学の重要な位置を占めている大宇宙と小宇宙の類似は、彼の人間学の中心でもある。フロレンスキイはこの類似をユダヤ教の教義の視点からだけでなく、様々な解釈から紹介している。例えば、グノーシス主義者ウァレンティヌスの詩学的な教えによると、プレロマ（充実）の奥深いところから現れたアハモート（知恵）

によって世界が創造された。例えば、アハモートの涙から海が生まれ、微笑みから朝焼けが生まれる、などである。

当然ながら、リヨンのエイレナイオスなどの聖師父たちはウァレンティヌスの奥義的な考察を否定しているが、フロレンスキイによると、使徒パウロにおける「第二のアダムとしてのキリスト」という教えと非常によく似ているということがある。さらにテルトゥリアヌスは人間の血管を川の流れるに、そして髪を芝生に例える。人間の身体を自然に喩える傾向はニュッサのグレゴリオス、ナジアンゾスのグレゴリオス、カイサリアのパシレイオス、ダマスコのイオアン、ペルシウムのイシドールスなど、多くの聖師父たちに見られる。したがってキリスト教においてこの教えは、大変権威のあるものだと言い切れるのである。

ここで明確に言えることは、フロレンスキイはバヒヤとマイモニデスを一つの基礎とし、彼の科学論を立てている。なぜならばこれらの思想家たちは、科学を一神教的に正当化しているからである。しかしフロレンスキイはバジレフスキイの疑問を用いて、さらに一歩進む。彼によると、「一神教だけが科学を行うことができるということである。」「一神教なしに科学はない」と、フロレンスキイは強く訴える

のである。先に述べたように、多神教の主なキーワードは、恐怖である。その恐怖があつたがゆえ、古代ギリシアの人々は物事を中心である心を見ることを恐れていた。そのため古代ギリシアにおける代表的な科学者、アナクサゴラス、ソクラテス、プラトン、アリストテレスの科学は、これから来るであろう一神教の期待の表れであり、後の一神教の科学のように優れたものではない。ティトウス・ルクレティウス・カルスは、エピク羅斯を科学者として賞賛しているが、フロレンスキイによるとそれは、宗教を信じない無神論者の科学への無知をあらわしている。エピク羅斯は一切、科学というものと関係はしていなかったとフロレンスキイは述べる。フロレンスキイによるとエピク羅斯教団は、すべての時代における「無神論的学派」と同様に、芸術性もなく、学を真の意味で発展させることはできなかった。古代ギリシアの思想家には学的な特徴が所々みられるが、エピク羅斯にはほとんど見られないとフロレンスキイは考へる。一方、ある民族が多神教から一神教に改宗すると、学的考察が必然的に生まれるのである。ここでフロレンスキイが例として取り上げているのが、アラビヤ人についてである。彼は『真理の柱と基礎』の中で、ガザリやイブン・スィーナーなどに言及することはないが、イスラム

教の誕生以来、アラビヤ人の世界には学的な知識というのが出来上がっていると論じる。フロレンスキイの言う一神教と学の関係性は、イスラム世界の場合、歴史的に証明されると言えよう。アラビヤ人はイスラム誕生以降に歴史に入り、イスラム世界の黄金の時代は、八〜十三世紀のことである。

七、フロレンスキイとポストモダンニズム

現代における知識への理解をまとめると、我々の時代はメタナラティヴの終焉の時代であると言える。ポストモダン主義者にとつて、一神教的思想もこの終焉に入っているということである。このようにして、我々は知識の正当化という問題にまで辿り着く。ポスト構造主義者ジャン・フランソワ・リオタールは、メタナラティヴという概念を導入する。彼の解釈によると、メタナラティヴとはすべての物事を説明できる全体主義的体系ということである。それはフィヒテやシェリングにすでに見られるのだが、特にヘーゲルはこのような体系をつくらうとしている。ドイツ観念論では、ある主体の生活の実現によつて、知識、社会、国家が発展していく。その主体とは、フィヒテの「神的な

生活」であり、またヘーゲルの「精神の生活」でもある。しかし、リオタールは次のように言う。この主体の発展という過程は、メタ原理に過ぎないのだ、⁽³³⁾。リオタールによると、メタナラティヴは信頼性を失ったため、これまでとは違った新しい知識の正当化が必要になってくるのだと言う。彼の主張するポストモダニズムの科学は、一つのメタ言語から成り立つのではなく、大多数の言語から成り立つのである。ポストモダニズムにおける知識の理解によると、その知識の基礎とは相対主義的なものである。さらに知識だけでなくすべての物事の性質は、一つではなく多様なものである。

一方、フロレンスキイにとって世界における最も重要な概念が、単一 (БЕДИНСТВО) である。科学、芸術、宗教などが一つのもの、つまり、神の被造物に対する様々な観察方法である。当然ながら、知識もこの単一に基づくのである。現代の思想または、世界観を代表するリオタールと近代を否定し、聖師父の思想を取り戻そうとしているフロレンスキイの二つのスタンスは、正反対のものである。リオタールはドイツの古典的哲学者フィヒテ、シェリング、ヘーゲルを取り上げているが、フロレンスキイが肯定する一神教的知識または一神教的学も一つのメタナラティヴになる

のであろう。フロレンスキイはこのような批判を予測できると言える。しかし、彼は相対主義的思考と対話をしようとして、思想、自然科学、芸術、社会などにおける相対主義を全面的に否定しているのである。そういう意味においては、フロレンスキイは二十世紀の独特な思想家だと言えるのである。

結論

本稿では、フロレンスキイにおける神と被造物の問題を考察してみた。フロレンスキイはこの問題を「一神教的伝統に基づいて解釈している。彼の主な神学的著作『真理の柱と基礎』の中で、彼は正教会の聖師父についてはもちろんのこと、ユダヤ教の神学者についても取り上げている。フロレンスキイによると、正教会のエジプトの聖大マカリオスやニケタス・ステタトスとユダヤ教のバヒヤ・イブン・パクダなどの共通点は、「心の神秘主義」にあるということである。この心の神秘主義は魂の救済とつながるゆえ、正教会の修行者たちはその修行に励む。また、魂の救済とは修行者たちの魂のことだけではない。彼らは自分たちの修行によって、すべての被造物の魂の救済の道を開いている。

フロレンスキイによると修行者たちは神の秩序や善を取り戻すことによって、救済を可能にしてくれる。しかし、秩序を取り戻すということは、その秩序を知ることでもあるとフロレンスキイは考える。つまり、正教会の修行は真の知識の基礎なのである。そのために、学的に考えることも、キリスト教ないし一神教の特徴である。したがって、フロレンスキイによると、多神教や無神論は真の学的知識を有しないということなのである。

フロレンスキイのこのスタンスは、現代のポストモダニズムの理解とは正反対のものである。リオタールによると、ヘーゲルの体系は一つのメタナラティヴにすぎず、このようなメタナラティヴを信じることはできない。置き換えてみると、フロレンスキイの言う「キリスト教的ないし一神教的知識」も、ポストモダニズムの観点から見れば、一つのメタナラティヴであることがわかる。しかし、フロレンスキイが相対主義を否定し、初期教会の知識論を取り戻そうとしたことは、非常に興味深いことである。グローバルな歴史学やメタ地理学の研究が展開されてきた現代において、フロレンスキイの知識論は再評価されるべきであると考えるのである。

註

- (1) O. Павел Флоренски, "Създ и крепило на истината опит за православна теодицея в дванадесет писма", Издателство Омфодор, 2013 (フロレンスキイ パヴェル神父「真理の柱と基礎」1914), p. 219.
- (2) Ibid.
- (3) Ibid.
- (4) Ibid., p. 219-220.
- (5) Ibid., p. 220.
- (6) Ibid.
- (7) Ibid., C. 558, note 453.
- (8) Ibid., C. 221.
- (9) Ibid.
- (10) Ibid.
- (11) Ibid.
- (12) Ibid., C. 239.
- (13) Ibid., C. 229.
- (14) Ibid.
- (15) Ibid., C. 222.
- (16) Ibid., C. 221-222.
- (17) Ibid., C. 222-223.
- (18) Robert Slesinski, "Pavel Florensky: A Metaphysics of

